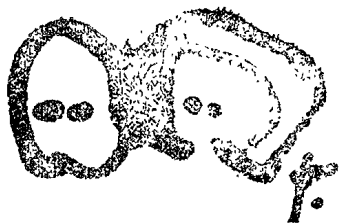


シンポジウム

マス・コミュニケーションと教育

十一月十六日 二時四十分～四時三十五分



出席者

日本電信電話公社	井口一郎
お茶の水女子大学	波多野完治
東京大学	日高六郎
東京教育大学	平沢薫
(司会) 成蹊大学	西本三十二

司会者 人間は社会的動物であると申しますが、これは人間は単独では生活することができないということの意味するばかりではなく、社会の中に生きて行くことにより人間が形成されるということをも意味するものであらうと思ふのであります。この意味において、教育は人間を社会化する過程であるというように考えることができるのであります。ところが社会生活は昔と今では質的にも量的にも非常に大きな変化を来たしておるのであります。その特色の一つは社会生活の領域が非常に広くなつて来たということであります。こういうような広い世界との接触というのは一体何によつて我々に行つておるのでありましようか。これは新聞により、或いは雑誌により、或いは映画やラジオによつて、更には近くはテレビジョンを通して、我々はこういう広い世界との接触を保ち、保つことにもなるのであります。これを総称して我々はジャーナリズムと言つておるのであります。而もこのジャーナリズムを支えているのは何かと申しますと、これがマス・コミュニケーションであります。昔の人間の生

活を考えてみますと、人間は大体自分の体と心を直接ほかの人々や、ほかのものと接し合つて極く狭い世界に住んでおつたのであります。こういうふうな人格と人格とが密接な接触を保つて行くところから教育が行われて来た。教育の最も重要な点はこのことにあるということをお我々は言つて来たのであります。今日このマス・コミュニケーションの時代の時代においてもこの狭い世界以外の広い世界からも我々が人間としての形成をなされつあるという事実を見逃すことができないのであります。殊に新しい時代においては、この広い世界が我々人間にどういふ影響を及ぼすか、我々の人間形成の上に如何なる働きをなすかということが大きな問題であり、この問題についての多くの未開拓の分野が残つておるのであります。そこで今日はこの問題についてここに御出席を煩わしました四人の講師によつてそれぞれの立場から説明をして頂きたいと思つてあります。

先づ初めに井口先生からお話を承ることにいたしたいと思います。(拍手)

井口一郎氏 今日このマス・コミュニケーション

ションは、例えば子どもが一步学校の枠の外へ出ますと、ヒューマニティを損うような媒介物が氾濫しておる。これが先づ問題になつて来る。教育とマス・コミュニケーションとは非常に深い。コミュニケーションの建前からは教育も一つの啓蒙或いは啓発の場である。ただ併し教育と映画、教育と新聞というものには厳しい区別があることを認めておるのであります。教育というものは、拘束されない状態におき、教育に対しては成るべく外部からこれに對して権力なり、その他の圧力を加えないでおくのが教育の教育たるゆえんである。こういう建前をとつておるのであります。

特に教育は社会を啓発することのためになるようなマス・コミュニケーションが行われることは甚だ望ましいと思つておる。それではマス・コミュニケーションは新聞やラジオや映画にしましても、皆教育のためにコミュニケーションしているかといふと、必ずしもそうでない。併しこれをマス・コミュニケーションの事業という建前から考えますと、我々は教育の仕事に従事しているのではない。同じ人間を啓発する、人のため

になることをしているといつてもそうではないといふところにマス・コミュニケーションの側から反対が起るし、又必ずしもこの二つは一致していると思つて見るわけには参りかねると思つておる。

次に新聞について最近のアメリカのコミュニケーションの学会で行われておる意見を申し上げたいと思つておる。それは新聞の記事内容は世の中の共通の関心事項の最低の水準を狙つておる。必ずしも高度なものではないといふことが一つである。それからもう一つの問題は新聞が読者大衆に対して勧告をすることは必ずしも受入れられるものではない。新聞の言う通りに大衆は動くものでないといふ点であります。この点に非常に注意を引いてきておるようであります。で、これについての例は最近のアメリカの大統領の選挙の結果です。例えば、一九一九年のニューヨークの新聞における市長の候補者、これはニューヨークの全新聞が時のゲイノーという市長候補者に反対したけれどもこれを支持して当選させた。それからミシガン州の知事の選挙のときにも新聞の九〇％は反対したけれどもこの知事

は当選しておる。又、最近の目新しい事例に、一九四〇年のウイルキーの場合、又トルーマン大統領の場合、デューイの場合、これら皆いずれも新聞の期待とは反した投票を以て当選しておる。こういう事例を調べて、新聞の言うことが強い迫力を以て大衆に訴えても必ずしも大衆の意見がそれに共鳴するものではないということの原因を究明して、一体新聞を読むのは誰かという問題を吟味しておるようであります。新聞を読むのは必ず中流階級以上、或いは上流階級の人たちであって、一般の階層の人たちは新聞なんか読みやしないんだ、それなら新聞は大して世の中に対して大きな影響を及ぼさない。今まで余りに新聞の力というものを過大視し過ぎていたんじゃないかという点であります。いま一つの例は、新聞事業そのものについて非常な反感が現われておることでもあります。新聞は公共の利益を主張するけれども、元来これは私設の利益団体の動かしておるものであるから、私設団体は幾ら公共のことを言ってみても最終的には自分たちの利益になるところに帰着するから、必ずしもこれは信用し

ないぞという点であります。それからもう一つは新聞記事そのものは必ずしも真相ばかり伝えていない、間違いが往々にしてある。新聞そのものに対して懐疑的な態度を持つ、この三つの原因で今までのように新聞の力を過大視することは遠慮しなければならぬという気持が動いておるのであります。これが今日の新聞というものに対する見方であります。それにもかかわらず大人の教科書として一番広く読まれるのは新聞である。これ以上のベストセラーはないんだから、とにかくこれが民衆の支柱である限りこれを尊重しなければならぬ。併しこれを過大に評価してはいけないという点に議論が帰着しておるようであります。

司会者 これと関連して東大の日高さんからお話をお願いいたしたいと思えます。

日高六郎氏 御承知の通りマス・コミュニケーションの研究は現在では大体幾つかの段階にわけまして研究が進められております。簡単に申しますと、一体誰がどのようなメディアを使って、つまり新聞とかラジオとか、どういうメディアを使ってどういうような内容を誰に伝達するか、そして

伝達した相手にどのような効果を与えるか、そういうような段階に従いまして研究が進められております。教育の問題とマス・コミュニケーションの問題とを考えます場合には、この最後の効果の問題が一番大きな問題になるのではないかと思うのです。ところがマス・コミュニケーションの研究の中ではこの効果の問題が一番むずかしい問題でありまして、現在のところそれを適確に計るという方法はわたくしの知っている限りではないように思うのであります。何故一体このマス・コミュニケーションの効果計ることは困難かと申しますと、それにはいろいろな原因があるのですが、一つはどうしてもマス・コミュニケーションに対してはパーソナル・コミュニケーションを考えなければいけないのではないかとわたくしは思うのであります。御承知の通りこのマス・コミュニケーションは人間相互の間のいろんな感情とか知識とか意志を伝達する大きなコミュニケーションの分野の中の一つの分野でありまして、一方にパーソナル・コミュニケーションというものがありまして、それでこのパーソナ

ル・コミュニケーションとマス・コミュニケーション・コミュニケーションとがどういふふうな絡み合つて現実に我々の意識内容なり、我々の態度なりを形成して行くかということをはっきりとらえるということは非常にむずかしいのであります。例えば最近清水幾太郎さんなどが新聞の大きな威力を盛んに強調されている。わたくしもマス・コミュニケーションの新聞の威力というものは非常に大きなものだとは思いますが、ただ例えば或る村を調査いたしました場合にその村の中で再軍備に賛成する人が非常に多い。それでも一方に新聞の内容を分析してみますと、最近の新聞の中には再軍備に賛成するような、或いは再軍備をしても構わないというようなことを暗示するような記事が非常にたくさん出ている。これは内容分析をすれば一応はつきり出て来るわけです。しかし二つの現象をつかまえて新聞の上でこういう記事が非常にたくさん出て来たから村のほうの人たちの意見がそっちのほうに傾いたんだというふうな断定することは非常に危険なのじゃないかと思うのです。それでその間にどうしてもマス・コミュニケーション

が個人に伝達する場合の通路というものを考えなければいけない。第一の通路はいわばマス・コミュニケーションが直かに個人々々にいわば直接に伝わって行くという通路であります。それから第二はマス・コミュニケーションが或る一人の、少数の人に伝達されて、その少数の人たちが又多くの人たちにいわばパーソナル・コミュニケーションの形態でそれを伝達して行く、例えば農村でありますと、一家の主人が新聞を読んでその新聞に出ていたことを家族の者に伝える、或いは何か新聞で読んで来たことを茶呑み話や何かのときに話をする、そういうような形で伝えられる。その二つの形式があると思うのですが、農村などの場合にはどうしてもこのパーソナル・コミュニケーションのウェイトというものを軽く考えるわけには行かないと思うのです。農村だけではなく、小さな中・小都市でもそういうことが非常に多いと思うのです。第一に考えられるのは、いわゆる意見の指導者、オピニオン・リーダーというのが存在するということです。これは村などでありますと、村の有力者とか、そういう

ような人の意見というものが相当に強く響くということですが。それから第二は村には固有のいわゆる社会的な雰囲気、或いはグループのスタンダードというものがある。例えば村の中で再軍備に反対するものは赤だというふうに言われることを非常に恐れるような心理がありますならば、新聞のほうで再軍備を主張しなくても、村の人たちの中には自然にそういう態度が出て来るわけがあります。ただマス・コミュニケーションの力を考えます場合にそういう中間的なパーソナル・コミュニケーションというものを無視することはできないのじゃないかと思えます。これについてドリアン・フルというフランスの社会心理学者が非常に面白いことを言っております。現代は宣伝の世の中だ、と言っているのです。この政治宣伝が最も効果を挙げるのは個人が全然孤立した場合にあるということをやっている。そして現に家族制度というものがあるに崩壊する。家族という壁がなくなつた個人に対して直かにマス・コミュニケーションが与えられるとその時最もマス・コミュニケーションの力が大きく働くという

ことを言っております。それからフロムもこれと同じようなことを言っております。現代社会の孤立した人間というものはいわばマス・コミュニケーションの威力に最も屈伏しやすいというようなことを言っているのであります。このことについても一つ非常に面白いのはホルクハイマーというやはり社会心理学者がファシズムの宣伝の方法を述べている中に、ファシズムはいわば個人と個人との間に信頼感をなくしてしまふ。つまり小さなグループの中でディスカッションができないような雰囲気を作つて、個人を孤立させておき、そして上のほうから強烈なファシズムの宣伝を与える。その場合に最も個人を引張って行くことができると思つておられます。井口さんがおっしゃいましたようにアメリカでは新聞を読むものが割に上のクラスである。ラジオがいわば下のほうのクラスに響いているということも勿論であると思つておられます。もう一つは職場とか或いは自分の家族、或いは近隣の人たちとの間のパーソナル・コミュニケーションの力も可なり利いておられるのじゃないかと思つておられます。これはフランスの

大統領選挙の例で一つあるのださうであります。その場合にいろいろ調べてみますと、結局労働組合とか或いは職場の中の話とか、そういうようなパーソナル・コミュニケーションの力が可なり利いて、そしてそのマス・コミュニケーションの宣伝に對抗したというような事実があるようであります。いずれにしても、マス・コミュニケーションのエフェクトというものを考えます場合にはいつでもさういふ小さなパーソナル・コミュニケーションの影響というものを併せて考えて行かないと、単純にマス・コミュニケーションの威力といつても、それははつきりと与えることができないのじゃないかと思つておられるのであります。

司会者 では続いて波多野さんをお願いいたします。

波多野完治氏 子どもにマス・コミュニケーションが与える影響というものは大体三つの立場から見ることができると思つておられます。第一番目は子どもの思想内容に与える影響であります。マス・コミュニケーションが例えば嘘を持込んだときにそれが子

どもの思想内容として嘘が子どもの中に入つて行く。第二番目は感情的な影響であります。マス・コミュニケーションの一つの特色は普通のコミュニケーションと違ひまして、特殊の感情を惹起することができるという点にあるようでありまして、新聞もさうであります。映画でありますとか、ラジオでありますとかいふものになりますと、普通のコミュニケーションでは到底出せないような非常に強烈な恐怖でありますとか、その他のいろいろな感情を惹起することが出来ます。これが子どもにいろいろな悪い影響を与えと言われておるわけでありまして。これは芸術形式としてのマス・コミュニケーションといふものからも考えられると思つておられます。第三番目はパーソナリティに与える影響でありまして、これは例えば、漫画を非常に好む子どもがいふ、コミックストーリー・ブ・マインド、漫画的な心性、非常に軽佻浮薄だとか、いろいろな精神が漫画ばかり読んでおる子どもに現われるといふことなんです。この中であとの二つをどうしたらいいかといふことは非常にむずかしい問題でありまして、

結局何らかの形で教育者の側からマス・コミュニケーションそのものを統制して行くとか改善して行くとかという方法をとらなければどうも不可能なんじゃないかとわたしは考えております。現在のところではそういうことができない状態なので、そこでこの二つについては今のところわたくしは現在の状態が続くかぎり絶望的なのであります。前の第一番目の思考内容に及ぼす影響については間違った考えを子どもたちを持たせない二つの方法があるんじゃないかと考えるわけであります。一つの方法は視聴覚教育という方法であります。視聴覚教育には二つの面がありまして、一つは正しい内容を映画なり或いはラジオなりを通じて与えて行くインストラクショナルな方面であります。もう一つの面はそれを与えて行く過程のうちにマス・コミュニケーションとはどういうものであるか、現実がどんなふうにデフォルメーションを受けてコミュニケーションに載せられるかを子どもたちが知るといふ面であって、即ち現実を象徴化、抽象化、或いは形象化するなりして、そしてコミュニケーションに載せられな

ければなりません。そういう場合にどういふ変形が行われるかを子どもがマス・コミュニケーションを視聴覚的な方法を通じていろんな勉強をして行くうちに悟るのであります。特に大事なことは視聴覚的な方法では視聴覚的な材料が提供されると同時に必ずそこでディスカッションが行われます。与えっぱなしということはないのであります。必ずディスカッションがおります。インテイク・グループ・スといっている感情がそこに成立して来るわけでありまして、インテイク・グループ・スというのは「仲良し集団」とか「打開け集団」と訳してみたらどうかと思っておりますが、そういうものがそこにでき上って来るわけですから。これが非常にわたくしは大事だと思っております。先ほどの日高さんの話だと個人が孤立した場合にマス・コミュニケーションというものが強力に働くというお話でありましたが、このインテイク・グループ・スといふものの形成は個人を孤立させないという働きをするだろうと思っております。それで戦争のときに通信が嚴重に統制されて、マス・コミュニケーション以外

の手段が殆んどなくなったときに我々が自然発生的にとる方法はほそほそ話のインテイク・グループ・スの形成という形であります。それによってマス・コミュニケーションがどんなに嘘をついても、或る程度までバランスがとれていたんであります。それをもっと意識的にやって、それでマス・コミュニケーションの悪い影響力を除くということが考えられるわけでありまして。わたくしはできるだけマス・コミュニケーションの効果を薄めることが必要だと思っております。そのための一番強力な方法として出たものが「綴り方」という方法だと思っております。これは視聴覚的な方法を使ってディスカッションをするのと非常に似ておりますが、これは子どもが自分の経験なり意見なりを書いてそして小集団に見せます。それに対して又いろいろな批判をほかの人がするというところであります。これが行われなくなると、今度は自分自身が書き手になったり、読み手になったりしてやって行くという一人の中での二人の交渉になって参りますが、そうでない場合でも極く少人数の打開け的な集団の形成と

いうことは「綴方」で確保することができ
るわけです。これを行って行きますと、例
えば「白髪三千丈」というふうな言い方が

あっても現実にはそういうものはないので、
ただの言葉の上の綾であるということが
使ってみればわかるのであります。こうし
て現実を言葉に変えて表現する場合にどう
いう嘘が入って来るかを実際に悟ることも
できますし、又その言葉を通じてお互いに
インテイメートな感情を作り出すこともで
きるのであります。そういう意味からマ
ス・コミュニケーションの特に思考内容の
嘘を発見したり、又そのマス・コミュニケ
ーションについての批判をやる方法として
視聴覚的な方法が表通りの方法であるとす
れば、綴りかたはそれを裏からやった方法
だ。この二つの方法を教育の中でうまく使
って行けばマス・コミュニケーションの影
響とか或いは弊害とかいうものの少くとも
第一番目の部分は防ぎ得るのじゃないかと
思うのであります。第二番目と第三番目の
ものは、この方法では防げないと思いまし
て、どうしてもコミュニケーション自体の
改善というものを伴わなければならぬ

と思えます。教育のほうだけが幾ら考えて
もこれは解決のできない問題じゃないかと
思うのであります。

司会者 では、平沢さんお願いいたしま
す。

平沢薫氏 マス・コミュニケーションは
本来の教育的内容をもって行われているの
であります。むしろ厳密に言いますと或
る消極的な企業性の上に立って行われる場
合が多いのであります。従って教育の観点
からみますと、或る場合においては人間に
及ぼす影響がプラスであったり、或る場合
においてはマイナスである。従ってそれを
ある角度からこれを測定するかどうかによ
って教育的であったり、教育的でないとい
ういうことが言えると思っております。
そこで私はこのマス・コミュニケーション
が現実においてどういう形において作られ
ており、それが現在受取る側においてどう
いう受取り方をしているかという問題を分
析してみますと一つの手がかりが得られる
のではないかと思っております。ジャー
ナリズムの世界においてはいわゆる「馴合
いの集団」とでも称するグループがある。

その集団がラジオや新聞やいろいろな出版
物に顔を出し、同じようなことを書いてお
るといふような機会が非常に多い。出版物
で言いますと現物は出ない前にもうすでに
広告を通してその馴合いの誰かが推薦を行
ったり、紹介を行う。受取る側においては
その真相がわからないのですから、自然一
方的に受取って来ているのです。従ってマ
ス・コミュニケーションの送る側の構成が
どうなっているか、どういう通路を持って
いるか、又その通路を独占しておるかとい
うようなことも可なり微妙になって来るの
であります。例えば農村でどの程度マス・
コミュニケーションが影響を及ぼすかとい
うことは、一般に強調されているほどそん
なに大きな影響を及ぼしていない。新聞を
読むといつても、決して丹念に読んでい
るわけではない。例えば漫画を真先に読ん
だり、連載小説を読むとか、社会記事欄の殺
人を読んでいます。従ってその受取り方、或
いはその読み方というものが非常に偏って
いる。成人層は丹念に新聞を読んだり、ラ
ジオを聞いているのじゃなくて、夜の時間
に一部分娯楽的なものを聞くとか、朝のニ

ユースとか天気予報というようなものを聞いたりしている。そういうような問題についてはむしろ大人よりも子ども自身が多く接触する機会を持ったり、或いは教師その他指導者の力を借りて、与えられたいろいろな情報を家庭に持帰って行くような操作もやっている。従って案外人層は余り受けていない場合が多い。ところが青年の場合になりますと、「二つの世界」というのはみずから国際的な舞台に直面し、その現実の経験を通して獲得したのでなく、マス・コミュニケーションや出版物に接することによっていつのまにか二つの世界という言葉を無造作に使い、「平和と戦争」を二つの観念として対決し、そこからもの考え方感じ方というものについて一種の紋切型ができる。こういうふうに我々はマス・コミュニケーションは或る場合には強く、場合によっては弱く、その与えられ方が直接であるか、間接的に来る場合かによって可なり度合いが違って来る。それからもう一点は、農村の青年たちも従来ですと案外自分の地域社会のことだけしか知らない。ところがマス・コミュニケーションに

よって自分たちの地域を超えたものになり関心を持つておる。国際間の問題、或いは外交上の問題、或いは大都市において行われる社会事象にも関心を持ち、可なりそれについていろいろ話合ったりする。こういう地域を超えた問題に視野が広まって行った。このことはこのマス・コミュニケーションが発達することによって大きな効果を及ぼしたのじゃないかと思う考えられます。それからもう一つ教育ではマス・コミュニケーションがワンウェイ・プロセス、一方的な過程に基いて行われて行く。例えば新聞記者が事実を選択し、更にそれを新聞記事に編集し、これを受取って読む。従ってその事実の中からどういふ事実をその新聞で取上げるかということはすでに編集者なり、或いは記者の手にあるわけです。受取る側においてはそれを単に一方的に受取る、それについて何らかの不满を持ち、いろいろの見解を持つても、併しそれは何らの通路がないのでありますから、ここに一方的な事実なり、或いは報道が流れ、自然説む側においてはそれを無造作に受けとる。自分で努力して或る事実の探究をしなく

ても、与えられたものを幾つかの新聞を説むことによっていつの間にかそういうような考え方や気持になる。そういう環境下におかれておるといふことが大きな影響を及ぼして行く。いい出版物というのは都会に偏在している。こういう文化財の偏在していることも実は可なりの影響を及ぼして来るのじゃないかと思うのであります。こういうふうにわたくしは農村の社会が現在おかれていろいろ異なる環境とそれからマス・コミュニケーションを支配している層と、そのいろいろな通路、そういうような絡み合いで今の農村においては或る方面においては非常に強く或る角度においてはそれほどマス・コミュニケーションは影響を及ぼしていないのじゃないかと思える。従って教育的に、望ましくないという現象というものは余り多く見られないのじゃないか、と思うのであります。

司会者 予定より時間が少し超過いたしましたので、皆さん方の問題とされる点を講師に質して頂くことにいたしましたと思います。

上村哲彌氏 日高さんに……。フランスの

大統領の選挙に新聞が支持したのと違った候補者が当選をした。その場合にこれは確かに職場のパーソナル・コミュニケーションでありませんが、ファンクショナルに見た場合には労働組合の一つのイデオロギーがパーソナルな方法であるけれども、実は機能的には、マス・コミュニケーションの力を発揮したと考えられませんか。

日高六郎氏 コミュニケーションの形態を三つに分けている学者がおります。一つはマス・コミュニケーションと、それからパーソナル・コミュニケーションですが、そのパーソナル・コミュニケーションを二つに分けて、極く二、三人で話す茶呑話というようなインティメートなコミュニケーション、それから中間的なコミュニケーション、そして問題中心的なコミュニケーション、例えばこういうような会合とか、又は国会の議事の進行の仕方とか、そういうものを挙げている学者があります。それで一つ問題になるのは子どもの場合のディスカッションと同じように、大人の場合もいわばディスカッションが非常にうまくできる場合と、うまくできにくい場合があるのじゃ

ないか。例えば農村なんかに行つて、みんな集つて農村の問題について話を聞きたいと言いますが、なかなか若い人達や婦人が発言しない。とかく村の有力な人達だけが発言したりなんかしまして、そのディスカッションがうまく流れないということがあるのであります。これがフランスとか、イギリスのように、永い間訓練を受けた国民ではうまく流れて行くのだと思ふのです。只今お話の労働組合のコミュニケーションという場合にはたまたパーソナル・コミュニケーションというよりも、むしろ問題中心的な、或いは中間的なコミュニケーションだろうと思ひます。

豊沢登氏 マス・コミが商業的な一つの企業として、一方的に我々に押し付けられる。勿論それに対してわたくしどもはいろいろな抵抗を試み、それから逃避するようないこともいたしますが、併しそれにも拘わらず、わたくしどもはそのマス・コミュニケーションの力の中に擱つており、それによつて人間が作られて行く。而も紋切型の人間に作られて行くという事実、この事実は何とかメスを入れなければならぬのでは

ないか、そういうことが教育社会学の立場から見たマス・コミュニケーションと教育の問題にはならないのか。

井口一郎氏 非常に問題になると思ひます。マス・コミュニケーションというのは、ワン・ウェイのコミュニケーションです。一方的に誰か放送する。そうするとそれが何千万という人に伝わる。その中であいつのことを言うて怪しからんと思ひましても、それに対して、反撃できないわけなんです。ね。抗議の申しようがないわけなんです。一方的に皆に伝わるわけでありませう。そのうちで多少見込みのあるのはニュース映画ですね。あれは一つの場面を写すその中の或る誰か行動する人がいますと、その人の行為に対して画面の中にそれを眺めておる人も写つておるわけです。そしてそれがいい、あれがいいとこう言います。それに見ておる観衆がその画面の中に写つておるところの人が表明している点に共鳴を感ずる。或いは自分の意見を画面の中の聴衆が表現しているという点が表示されるわけです。こういうようになればこれはツー・ウェイになつて来るわけでありませう。相成るべくは

こういうようなコミュニケーションが行われれば一方的なトラフィックでなくなるという点があります。また、P・T・Aその他蹴起して、こんな放送じゃ困るから、これに教育的なものを入ると言うのも一つの方法だろうと思います。これは一つのコントロールであります。併しこれは民衆的な立場からの統制であって、上から来る統制でない。マス・コミュニケーションは常に国民の手、民衆の手のうちに残されていないければならない。従って国民の手によってこれを統制して行く。こういう建前です。

それからもう一つ、先のことです。が、テレビジョンが始まりますと、今までのような表面的なコミュニケーションよりも、もっと内観的なコミュニケーションが行われると思います。アメリカで調べたところによりますと、子どもは、大体一日にラジオは三十分しか聞かなかったのにテレビジョンの前では、必ず二時間は時間を費す。二時間物を見、物を聞くならばその間に、先ほど申しました啓発的な場面をできるだけ余計送るようになれば、これは非常に国民の教育的、文化的水準を高めるこ

とになるのじゃないか、こうわたくしは考えております。

畠山氏 非教育的なマス・コミュニケーションを教育的にするようないろいろな方法を農村とか、漁村における社会的な見地から話して頂きたいと思います。

平沢薫氏 一つの実例を挙げますと、ラジオの放送討論会が日曜日の午後一時にありますが、これを単にめいめいの人がラジオの前で座って聞くということだけでなく聞いた後で、お互いがこれについてディスカッションする、いわゆるツィ・ウェイ・プロセス的な形において放送された問題を自分たちが更にそこから論議し合う。こういうようなことが若し行われれば、これはラジオを通しての教育的な取上げ方でもあると思うのです。民衆は自分たちの持つておる意見は述べる機会がない。ワン・ウェイ・プロセス的に作られたものが単に受取られるということであつたら、紋切型なものを受取ってしまう。それでは反駁しようにも反駁しようがないのじゃないかと思えます。

馬場四郎氏 マス・コミュニケーションの力というものをね返すためには、学校

や公民館のような施設を持つている場合には、それを一遍はね返すための仲介に立つリーダーがあり得ると思うのです。そういう人々のパーソナリティーにはどういものが望ましいかということが一点。それから家庭や単なる群衆のいうようなものの中に行われるいろいろな調査をどのように正しく方向付けて行くかということです。ここにはリーダーがいらないと思うのです。

波多野完治氏 中間にいるディスカッション・リーダーの養成、それを再教育して行くことが今の日本では一番足りないのじゃないかと思うのであります。そういう人はどうい性格を持つべきかはいろいろ考えられるだろうと思いますが、少くとも自分でものを考えるという習慣を持つている人であるということ、自分で考えたことを人に強制するのではなくて、人に成るべく励めて自分でものを考えるようにする。即ちこのマス・コミュニケーションで伝えられて来たものをいいにしても、悪いにしても一ぺん批判的に、自主的に考えて受入れるなり、はね出すなりして行くというふうな習慣を皆に形成できるようにしない

かと思えます。地方の有能な人をだんだんに科学的に組織すれば可成大勢の人がデイスカッション・リーダーの技術を科学的な方法で身に付けることができるのじゃないか。そういう中間の人の養成というところが現在の成人教育の立場から言いますと、成人教育で国民を教育するために一番必要なことじゃないかと思えます。

司会者 イギリス放送協会BBCはそのデイスカッション・リーダーというものの養成に非常な力を注いでおります。

日高六郎氏 デイスカッション・リーダーはソ連が非常にやっているように思えます。ソ連のラジオでは何か非常に重大な問題のときには、成るべくみんなで聞くように、そして聞かしておいて後でやはり覚などからいろいろなリーダーが来てデイスカッションをやる。これがいわばエフェクトを強める上においては非常に効果がある方法だそうであります。

それから地方に行きまして、プロパガンダーと教育というものをどこに限界をつけたいかという質問をよく受けますが、これはわたくし自身どういふうに処理し

ていいのかわからなくて、むしろ現場の方々の御発言をお聞きしたいと思っているのです。少しやって行きますと、どうしてもそういう政治的な問題にぶつかって来る。そこで現場の先生は困る。例えばマス・コミユニケーションの威力というもの、圧力というものに対して抵抗させるように生徒を持つて行くということになって来ますと、

現在の日本の新聞で書いていることは必ずしも信用ができない世界の対立の一方的なニュースしか伝えていない。というようなことになって来ますと政治的な問題になって来るのであります。この点非常に現場の先生方としては苦心なさっていらっしゃるようなんですが、それをどういふうに処理したらいいか、わたくし自身いつも質問を受けて弱っているような点であります。

杉田氏 新聞を中心に考えますと、その発達は大体資本主義の発達に並行して表れておるように聞いております。それで資本主義の発芽期ではニュースとビュースとが混淆していた。資本主義が一応成長した場合にはニュースよりも絶対的に意見が強かった。而もそれが或る政党の機関誌のもの

に変わって来た。それから只今ではニュースが表に出ていて、ビュースが裏に隠されているかういふような一つの歴史的な推移があると思うのです。現状ではマス・コミユニケーションの自体の構成がどのようなになっているか。アメリカなどにおいては一つか二つの財閥によってそれが握られておるというような状態があると言われておりますが、日本では一体どうなっておるのでしようか。

井口一郎氏 日本の新聞というものはおっしゃったような意味で、結構だと思えます。現在のところではやはりニュースを一番尊重しているように考えます。社説のよくなるものは、どっちかと言いますと、一般の人々はこれを余り読まないだろう。それよりも小説や、漫画を読む人のほうが多いと思うのです。只今の新聞は一つの資本主義の道具じゃないかという見方でありすが、新聞もやはり一つの企業会社として存在していると思えます。ただマス・コミユニケーションの問題は、成るべくこの仕事に携っておる企業体が独占の形態をとらないように阻止する。お互いに競

争して独占的なものにならない。同時にできるだけ読者大衆というものにチャンネルを開放するという建前を現在の日本の新聞もやっておると思います。もし一つの企業体が一切のニュースを独占してしまうような場合はその圏内の人以外には無関係なニュースも出るでしょう。そういう場合には読者がそういう新聞を支持しなくなる。そうするとその新聞は成立しなくなる。そういった独占的な形態に対する大衆の反応というものによって今言ったような独占的な方向への行過ぎを矯正し得るといふ一つの途が残されておるわけでありませう。

関口隆克氏 新聞やラジオなんかの我々に与える影響の中で自分が気が付かない一番大きいと思うのは、自分がおちよこちよいになって行くのじゃないかということ。その次におちよこちよいのもう一つの形ですが、非常に移り気で、前に言ったことと、後に言ったことはほとんど無連絡に変わって来るような自分になって来るのではないかというふうなことであります。さっきの平沢さんの馴合グループを登場させて舞台を廻す人というグループがどっかに

あるのじゃないか。その舞台廻しの人達は非常に利口であり、おちよこちよいでありまして、その利口な編集者の手によってジャーナリズムなどが非常に断定的にものを言っているようなことになってしまふ。その結果、読者の方はいつもそれに触れておりますから性格的にそういうおちよこちよいにさせられて行くのではないか。

波多野完治氏 ラジオなどでは一番問題なのはラジオの中味が正しいものか、正しくないかということではなくして、その提供の仕方が低級である、品が悪いような提供の仕方をする。そういうものについてはいいとか、悪いと言うことが非常に言いにくいものですから、永い間やっているうちに段々そうなって来てしまふ。それでこれについてアメリカの教育社会学雑誌で漫画の問題を取上げまして、かなり永い間何号かに亘ってディスカッションを行ったことがあります。子どもに与える漫画の影響、それから大人に与える影響と分けて、大人に与える影響の場合において戦争に協力するよるな漫画が出たのであります。漫画はちつとも悪くないというふうな意見も出たので

あります。後のほうの感情的な価値、それからパーソナリティーに与える影響というよるなものをどういうふうに処理して行ったならば、只今関口さんが言ったようないい面を出すことができるだろうかということには教育社会学の問題として非常に大事だろうと思ひます。

太田氏 ちょっと変わったことを申し上げますが、お耳障りかも知れませんが、大体このコミュニケーションにつきましては、一番大きなことはそれが独善的に、一方的に与えられておるといふことであります。それを防ぐ問題としてはどういふ教育内容をそれに取入れるかということが一番の問題だろうと思ひます。それについて逆にそれをどういふふうにして教育して行くかといふことの問題が取上げられなきやならんといふことについて、漠然としたお話しかないのが不満でありました。マス・コミュニケーションになりまして、相手がどうかといふことを考えて教育内容をもう少し内面的に亘つても考えることの問題が大きいと思ひるのであります。

司会者 我々はマス・コミュニケーション

ンの技術を今後その当事者にも大いに勉強して貰わなければならないと思います。

三沢氏 平沢さんがさっきお使いになつた馴合グループというものは、ただ単に抽象的、観念的存在ではなくて歴史的、社会的存在だと思つてあります。従つてマス・コミュニケーションのマイナスの面に対する改善策と言いますか、マイナスを少しでもなくして行くような方法としてさっき波多野さんは綴り方について申されましたけれども、もっとそれを積極的な社会的な機構の問題として取上げなければならぬんじゃないかと思つてあります。

平沢薫氏 それは消極的という意味じゃなくして現状の中の或る姿を取上げたのであります。そこでこの問題に対する一つの対策としてはやっぱり新聞にしろ、ラジオにしても全く見解の異つた思想の人でもやはりしゃべらせる機会、或いは見解を披瀝せしめる機会も必要でしょう。例えば投書欄というものがもっと拡充され、或いは投書欄以外の方法も考えられるのじゃないかと考えます。

江沢氏 教育者の側からマス・コミュニケーションを統制して行く、というお話が波多野さんからありましたが、そのマス・

コミュニケーションに対して反抗して行くとする教師自体の方が、マス・コミュニケーションに引きずられていく傾向が強いんじゃないか。そういうような現場の教師自体がマス・コミュニケーションに引きずられて行つたのではマス・コミュニケーションに対しての統制とか、改善はなかなか難しい。その現場の教師を指導して行く問題があるのじゃないかと思つてあります。

日高六郎氏 一つは独占化を成るべく防ぐこと、一つは民衆の中からそれに対して批判の声をどんどん出すようにすること、これが一番肝心なことだと思つていますが、不幸にして新聞の面だけで申しますと、日本ではやはり三大紙の力というものが圧倒的に強い。例えば日教組のあつた新聞とか、或いはもっと小さな地方の新聞でもなかなかいいものがあるのです。ああいう個々の力を成るべく養つて育てて行くことが必要なんじゃないかと私は考えます。

司会者 マス・コミュニケーションが我が国の教育界に問題になって来たのは最近二、三年來のことでありまして、勿論この問題はマス・コミュニケーションが存在し、ジャーナリズムが存在したときからあつたのでありますけれども、これを教育

問題として取上げ、積極的、意識的に取上げられたのが最近数年來のこと、殊に終戦後のことであるといつてよからうと思つてあります。従来教育というものは学校内の教育或いは教室内の教育ということが殆んど教育の全部であるかのごとくに考えられて来たのに対して、マス・コミュニケーションを教育の対象として考える場合には従来教室内、或いは学校内の教育だけでは割切れないものが多く出て来ています。考えられるのであります。更に又教室内の教育或いは学校内の教育といえどもこのマス・コミュニケーションを如何に取上げるかという問題が又新しい問題として起つて来ておると考えてよからうと思つてあります。今後世の中が一層拡大されて行くに従つてこの問題は我々に多くの問題を提示することであろうと思つてあります。提供することであるかと思つてあります。提供することはできないと思つてあります。できないといふことは問題が小さいといふのじやなくして、問題が大きく、且つ重大であるといふことを意味するのであります。本日はこれを以てこのシンポジウムを終ることになります。

御協力を感謝いたします。(拍手)